

我は如何にして活動家となりし乎

第10回 被ばく牛を生かす道が放射能汚染地帯を救う！

吉沢正巳（希望の牧場）代表

1 希望の牧場

私は現在、福島第一原発から一四キロ地点にあるエム牧場浪江農場の場長として、立ち入りが禁止されている警戒区域半々（二キロ圏内）に残された約三〇〇頭の被ばく牛に毎日餌をやり続けています。

同時に「希望の牧場（ふくしま）プロジェクト」を立ち上げ、警戒区域内の牛の命をつなぎ、単に殺処分するのではなく、継続飼育することで、今後の放射能災害の予防に貢献できるような科学的データを集積し、学術研究などの目的に活用することを提案しています。

た開拓団の人々は自力で日本に引き揚げるしかなかったのですが、ソ連の戦闘機は空から狙ってくるし、反感を持っていた地元住民からも襲撃され、ひどいありさまだったそうです。父は語りませんでしたが、黒台開拓団の記録によると、父は、向こうで生まれた自分子ども三人を、一ヶ月近い逃避行の混乱のなかで殺してしまう。当時、生き残るために子どもを手にかけてたり年寄りを置いてきたりという悲惨な例がたくさんあったそうです。母はなんとか日本に辿り着き、小千谷で父を待っていたのですが、父はソ連軍につかまり、シベリアに抑留されました。連行先はバイカル湖付近で、劣悪な環境のなかで強制労働に従事させられたそうです。極寒の地での過酷な労働、また栄養もろくにとれず、数多くの捕虜たちがばたばた死んでいくなか、父は栄養失調になりながらも生きのびて、三年ほどで小千谷に帰ることができました。

2 開拓農民としての父親の半生

エム牧場浪江農場のある福島県双葉郡浪江町に移住してきたのは、父の代のときです。父の人生は開拓・開墾の連続でした。

父の実家は新潟県小千谷市にあり、父は農家の三男でした。当時の農家の次男三男は、兵隊に行くか、満州に行くかしかなかった。父は母と結婚後すぐに、開拓移民として、満州に渡りました。ほんとうは南米に移住しようと思っていたらしいですが、結局満州事変以降、日本政府が国策として推進していた満州開拓移民になったのです。満州では、ソ連国境地帯の黒台開拓団に属していました。主に牧羊や畑作をしていたそうです。一〇年ほどして敗戦になるのですが、敗戦直前にソ連軍が満州に侵攻し、関東軍は開拓団を捨てて逃げるといふまさに「棄民」をした。取り残され

しかし、敗戦になっても農家の三男は、小千谷では食べていけません。当然、父母もいつまでも実家に厄介になっているわけにはいかず、今度は千葉県四街道に開拓入植しました。四街道は明治期に陸軍野戦砲兵学校が開設されたのをきっかけに、旧陸軍の施設を中心に「軍都」として発展し、敗戦後はその跡地も含めて戦地から引き上げた開拓者の入植が進んだ土地です。国としても食糧増産という目標がありましたから、国が土地を割り当てていました。

四街道では最初、養鶏や酪農、落花生の栽培などをしていました。そこで、四人の子どもが生まれるわけです。兄と姉と私と弟ですね。家族経営だったので、私は子どもものときから、手伝いをしていました。やがて父は搾乳牛を増やしていき、酪農家としてやっていくようになりました。



エム牧場浪江牧場の看板



吉沢正巳氏(撮影/編集部)



警戒区域への車両通行許可証。発行は2週間単位になっている

一方、農村だった四街道は市街化が進んでいました。東京のベッドタウンとして住宅が次々に建ち、さらに成田空港建設の話も持ち上がっていました。ちょうど田中角栄の日本列島改造プログラムが起きた時期で、地価が急激に上昇していました。同じ新潟の出身ということもあって父は田中角栄を信奉しており、当時「二〇年寝かしておく」と土地は倍になる」とよく聞いていました。そうした時代の波に乗って、木更津のほうに山を買ったり、いわゆる土地転がしが上手くいっていたんですね。羽振りはよかったです。最終的に、満州時代の友人に誘われて、浪江町に、牧場用地として三二ヘクタールの土地、また山も購入し、さらに駅前にアパートも建てました。だから、父の昔のことを知っている地元の子供の年寄りたちのあいだでは、父が地下足袋を履いて南京袋に札束を詰めて、山を買いにきていたというような話がまだ残っています。余所からきた土地成金の酪農家という感じでしょう。

3

浪江町の反原発運動

四街道時代に話に戻すと、私は中学卒業後、佐倉市にあった佐倉高校に行きました。高校でも学園紛争のあおりを受けて、進学校で学校占拠などがおこなわれていました。ちょうど成田空港建設に反対する三里塚闘争がいちばん激化していた頃で、機動隊の車両がしょっちゅう高校の前を走っていましたし、闘争に参加し

はじめました。当時、浪江町では反原発運動が続いていました。浪江町議会は、一九六七年に住民に何一つ説明することなく浪江・小高原子力発電所誘致を決議しましたが、その後誘致反対の住民運動が起り、以来、原子力発電所の建設を繰り延べしてきた歴史があります。私はその運動に関わっていました。反原発を掲げて県会議員選挙に三回ほど出馬しました。結果的には、あとでお話する産廃建設反対運動が盛り上がっていた二度目のときは、七五〇〇票ぐらい集まりましたが、それでも当選には至らなかった。県会議員になるには、一万票以上は必要でしょう。ただ、私自身としては、当落より、選挙演説でいたいことを訴えることができたというのが収穫でした。

しかし、原発建設のための買収が露骨な私たちでおこなわれ、反対派は次第に切り崩されていきました。それでも複数の人がとうとう最後まで土地を売らなかつた。結局、福島第一原発事故を受けて、浪江町議会は、二〇一一年、二本松市で開催された二二日月定例議会で浪江・小高原子力発電所誘致決議の白紙撤回を全会一致で可決することになるのですが、住民の力で原子力発電所建設を阻止してきた浪江町が、今回の原発事故がまき散らした放射能で警戒区域に指定され、「チェルノブイリ」になってしまったことは、ほんとうに無念としかいいようがありません。

また、二〇〇〇年、突然、南相馬市原町区大甕で産業廃棄物処分場の建設工事がはじまったときにも、付近住民の反対運動が起

ている仲間もいました。私はそこで農家が土地を奪われることを目の当たりにしたんです。そして、自分もいずれは学生運動に関わっていくようになるだろうと思っていました。一九七〇年代というのは、私にとってはそういう時代でした。実際、一九七二年に兄と同じ東京農業大学の畜産科に入学した私は、畜産の勉強をほったらかしにして、一年留年するぐらい運動に没頭しました。学費値上げ反対やベトナム反戦といった学生運動がそれなりに盛んだった時期です。全日本学生自治会総連合(学連)に加盟している東京農大学生会という八〇〇〇名ぐらいの自治会の委員長をやっていました。

一足先に浪江町に戻っていた兄は父と共同で牧場経営にあたっていました。ただ経営をめぐる父と兄のあいだには大きな対立があったようです。とつきみあいの喧嘩もしょっちゅうでした。前にもいった通り父は田中角栄を尊敬していましたし、かたや兄は大学時代にいわゆる民青系の団体で活動し、共産党でしたから、シベリア抑留という悲惨な目に遭った父にとって共産党は許しがたいものだったでしょう。父がよく「お前らみたいな赤大根と違うんだ、俺は現場仕込みだ」といっていたのを覚えています。また兄は兄で、畜産を大学で勉強してきたという自負もあったのだと思います。この確執は父が一九八九年、六五歳のときトラクターの横転事故で亡くなるまで続きました。

一九七七年に私も浪江町に戻り、父と兄に合流して牧場で働きました。すぐに「大甕産廃から命と環境を守る市民の会」という市民組織ができて、大きな運動に広がりました。いまの南相馬市長桜井勝延さんは、当時その組織の事務局長をやっていた方です。市民の会は、建設予定地の一部を買い取り、工事阻止に出ます。二〇〇一年には工事差し止めの仮処分を地裁いわき支部に申請して仮処分は決定しましたが、二〇〇三年に仙台高裁が取り消します。結局、最高裁までいって、この一〇年にわたる裁判は負けたわけです。まだ建設工事は阻止しています。ただ、今後、警戒区域が解除されれば、建設工事が再びはじまるような状態ではあるんです。農家というのは、産廃やゴルフ場開発の問題に翻弄されるんですね。漁師もそうです。巨額のお金が動きますからそうやって買収されてしまう。実際、先ほど話したように、東北電力の浪江・小高原発のときも、買収による切り崩し、分断が露骨におこなわれていました。

父の死後、牧場は、兄が相続して、私と共同経営をしています。だが、牧場が平地ではなく丘陵地帯だということもあって、牧草やトウモロコシなど家畜の餌をつくるための造成工事を何度もやり、利益はすべて注ぎ込むような状態でした。また不運にも結婚詐欺にも遭い、兄は「もう格好悪くて浪江にいられない」と牧場から手を引きました。そして私が三代目として引き継ぐことになったのですが、土地以外、何も残っていない状況でした。その頃にエム牧場の村田社長と出会ったんです。彼が、これまでやってい

た酪農から和牛の飼育への転換を提案してくれたんです。再びこの牧場で牛を育てられるということで、率直に嬉しかったのを覚えていいます。エム牧場の牧場は、福島県内に七箇所あって、全部で二二〇〇頭ほど和牛を保有していたんですが、そのうちの三〇〇頭を浪江農場長として私が預かることになりました。

4 3・11と原発事故

東日本大震災が起きた夜、町を見に行くと、警察や消防が海岸に救助に向かおうとしていました。ところが、原発が危険な状態になり、撤退せざるを得なかった。生きていた人もいたのに見捨てざるを得なかったそうです。明けて三月二日、浪江町全体の避難が開始されましたが、停電のため給水ができない状態で牛をほうっておけないと思って、私は牧場に残っていました。そこに早朝、福島県警の通信部隊が来た。うちの牧場は、福島第一原発から一四キロ地点の小高いところにあるので、原発がよく見えるんです。「県警のヘリから第一原発のライブ中継をしたいので、その基地にさせてくれ」というので、了承しました。それで彼らはすぐに発電機や衛星機材をセットして通信をはじめたんですが、その日の一五時三六分の一号機の爆発をライブで中継したあと、すぐ撤退するといいました。県警本部から撤退命令が出て、「とうとう来るべきものが来てしまった！ 国は情報を隠しているか

ら、牧場にはないほうがいい！」そういうのこして引き上げていきました。その隠していた情報というのは、あとでわかることですが、SPEEDIによる放射性物質の大気中濃度および被ばく線量のことでした。

浪江町には、原発事故について国や県、東電、オフサイトセンター(緊急事態応対策拠点施設)などから何の情報もおりてこず、町長はテレビを頼りにするしかなく、三月二日に、防災無線で逃げようと呼びかけました。その呼びかけに応じて、浪江町の山間地の津島に、約一万人の人が集まって逃げた。牧場からその様子が見えました。ところが、三月四日に三号機で起きた水素爆発の噴煙にともなった放射能混じりの雨が、雪が、避難していた津島に降ってしまいました。私は農場でそのときの爆発音を二回聞きま

した。
連絡のために、私は浪江牧場と二本松にあるエム牧場の本社を行ったり来たりしていました。一一四号線の道路沿いの大栎ダム
のわきに、自衛隊の化学防護隊が駐屯していたのを覚えてい
ます。当時検問をしていた警察官は、線量計を持っていて「線量が普
段の一〇〇〇倍にあがっているから、行っちゃだめだ」と何度も止
められました。毎回警察官といひ合いながら牧場に通っていま
した。彼らは「牛の命と人間の命、どっちが大事なんだ」と聞いて
きます。私が「わかっている。自己責任だろう。放射能がぶつ
たって、即死なんかしない」というと、向こうはそれ以上止める

ことはできなかった。

5 東京電力本社へ

三月一六日に、福島第一原発上空から自衛隊のヘリコプターが放水を開始しました。私は牧場にある自宅の二階から双眼鏡でその放水作業を見ていたんです。すると、突然白い噴煙があがった。自分の目で噴煙を見たんです。停電のなか放射能が迫ってくるなかで、一週間近く、どうするか決断できなかったんですが、これを見て、経済活動としての畜産の意味がなくなったことがはつきりしました。村田社長が肥育牛の出荷先で被ばくした牛の出荷を断られ、浪江農場の意味は終わったと理解したときに、がっくり落ち込んで、浪江農場はもはやこれまでと思いました。

一方で、自衛隊の決死の放水作業でたぶん何人かの死者が出るだろうと思ひ、非常に感銘を受けました。

それで、牧場の牛舎の屋根とタンクとブルドーザーのブレードの三箇所、「決死救命、団結！」という言葉を書きこみ、自分で書きこみ、絶望的危機に、自分に對する気合いを入れ、みんなに団結を呼びかけるものすごいスローガンになるだろうという予感を持ちました。また、浪江



ブルドーザーには「決死救命」の文字が書かれている
(撮影/木野村匡謙)

町には放射能でもう帰れないかもしれないとも覚悟していましたから、遺言のつもりでもありました。

同居していた姉や甥を千葉に一五日に避難させて、一七日の夜、軽のワゴン車にスピーカーを乗せた宣伝カーで、東京電力本社に四号線に向かいました。しかし、当時はご存じの通りガソリンがなかった。牧場にあった廃車のタンクにドライバーで穴を空けて掻き集めたガソリンを積み込みました。東電に乗り込んで抗議したかった。村田社長にそのことを告げると、彼も「この被ばくした三〇〇頭の牛の損害賠償請求の裁判も必ずやる。東京で頑張ってくれ」といつてくれました。明けて一八日、いよいよ東電本社に乗り込んだわけです。報道陣や機動隊がたくさんいて、すぐ警察官に取り囲まれてしまった。それで、「俺は浪江から来た牛屋だ。三〇〇頭の牛が放射能にやられて、水も電気もない状態で、いざれ死んでしまうだろう。そのことで話があるから、通してく

れ」と話しているうちに、本社の入り口で突然大泣きしてしまいました。すると警察官も驚いて、とにかく話を聞かからとて、結局通してもらえた。応接室に入ると、まった私服警官三人と一緒に待っていると、東電の総務グループの主任が出てきた。東電は、当時、福島第一原発から全面撤退しようとしていたので、私の要求は、三〇〇

頭の牛の弁償を絶対に求めることと、死んでもいいから水をかけ、絶対に原発を止める、のふたつでした。さらに、一ふざけるな。いまは逃げるるときじやない。いまが闘うときなんだ。俺なら原発に飛び込んで水をかけに行こう」と三〇分くらい責め続けました。最後には東電の担当者が泣きだしてしまいました。

その後も寒い宣伝カーで野宿しながら、数日間東京に滞在しました。四〇年以上、福島電力に頼って便利な生活をしてきた東京の人たちに、大地震、大津波、原発爆発事故のなかでの浪江町の無念の気持ちをぜひ生の声で、東京のと真ん中でいいいかなかったので、丸の内警察署に街頭演説の許可証をもらいに行きました。警察は「気持ちよくわかる。えらい。しかしいまは津波で大勢の人が流されている。だからまだ時期が早すぎるだろう。だからいまは許可は出せない」という。あとでわかったその理由は、三月一六日に天皇が震災に対しての「おことば」としてビデオメッセージが出た直後なので、皇居周辺の街頭で、スピーカーでしゃべるといのは警察としては許しがたいことだったのでしよう。次に農水省に行つて、原発事故で牛が死にそうになっているからなんとか助かる手立てを取つてくれないかという申し出をし、次に原子力安全保安院にも行き、国がやってきた原子力は安全だという宣伝は嘘っぱち、三号機はプルサーマル燃料を使ってプルトニウムが飛び散ってしまった、あんなたちの仕事は原子力危険不安院だときっぱりいつて伝えました。最後に首相官邸に、枝野官

房長官に会わせてくれ、話がしたいといいに行き、警察官に取り次いでもらったが、いきなりアポなしでこられても困る、出直してこい、という返事でした。

街頭で浪江町避難民への募金も募っていました。ただ、このまま抗議活動が続けるのか、千葉にいる姉の厄介になるか、あるいは放射能で汚染された浪江町に帰るか迷ったのですが、結局村田社長のいる二本松市へ帰ることにしました。

6 浪江町の牛たち

三月二日に二本松に帰つて、抗議活動の報告をして、翌二日から、浪江農場に牛の餌を運ぶことにしました。相馬市にある「成田食品」のもやし工場から、もやしの搾り粕をもらつて、それをトラックで運ぶんです。三月の浪江農場には牧草もまだ生えていません。餌を運び込まなければ、牛たちは生きのびることはできなかつたでしょう。これをいまままで続けています。牛を収容する牛舎も手作りで、他の施設の建設工事も自分たちでやってきました。そういう、自分たちがつくつた牧場で、牛を餓死させるということは、到底受け容れられなかつた。

警戒区域には、約三〇〇軒の畜産農家と、数十軒の酪農家がいきましたが、ほとんど全滅に近い状態でした。うちの牧場以外にも取り残された牛がたくさんいましたが、自分の三〇〇頭を食わせ

るのが精一杯でした。ほかの牛舎では水も餌もなく牛たちがやがて痩せ細つてミイラみたいになって倒れていき、死体が腐つて蛆が湧く状態でした。そういうひどい牛舎を目撃していたから、自分たちの牛は絶対に守ろうという逆のスイッチが入つたんだと思います。

五月二二日、政府は警戒区域に残る家畜を、所有者の同意を得て、すべて殺処分にする方針を福島県に通知しました。その説明会がいろんなところで開かれました。当然、紛糾します。酪農家の人たちは、乳の搾れない牛を置いてこざるを得なかつたのです。が、和牛の繁殖農家では、牛がかわいそうだとすることで放した人がけつこういた。それが野良牛問題となるわけですが、餓死するよりはましだということだったんです。避難所で、自分の飼つていた牛が死んでいく夢にうなされるわけです。牛に申し訳がな



もやしの搾り粕をほおぼる牛たち
(撮影/Kumiko OTANI)



取材当日も、吉沢氏は牧場へ
餌を運ぶところだった
(撮影/編集部)



子牛の死骸
(撮影/Kumiko OTANI)

いということ、ノイローゼになってしまふ人もいました。牛飼いは農家の精神は折れてしまったのです。農家の人たち五人ほどが絶望の淵に立たされ自殺しました。

当時、エム牧場浪江農場の三〇〇頭を含め六〇〇頭ほどの牛が被ばく牛になり売り物にならなくなつたことに対して、村田社長は東電に対して六億円の請求書を出しました。これについては、五億円の補償はすでに支払われました。私たちは補償については、必ず東電からむしりとるという決意を持っていました。そのため、どうすればいいか考え、黙つていても結果なんて出ないから動くしかない、私先陣を切つた三月一八日の抗議以後も、毎月二回東電本社に補償要求と抗議に行つていました。それが大きかつたと思います。東電によると、エム牧場には手早く払つてくれたそうです。いまでは山のような請求書をかかえていますから、

東電はなかなか動かないでしょう。ただ、牛の補償はおりましたが、放射能を被つてしまつた牧場の敷地や施設や住宅といった、私たちの暮らしに対する補償は、これからです。浪江町に住む私たちは、チエルノブイリの再来ともいえる放射能汚染地帯として、運命の重い十字架を引きずりながら子どもや孫の世代までも生きていかねばなり

ません。犠牲と差別を受け続ける当事者として、東電と国に対しては無念の思いを晴らし、償いを求め続けたいし、自滅するわけにはいかないのです。

7

希望の牧場立ち上げ

四月二二日、福島第一原発から半径二〇キロ圏内が「警戒区域」とされました。許可なく立ち入れれば逮捕・拘留するということで、パリケードがあちこちにつくられた。当時、役所に何度申請しても許可証がおりなかったため、餌の運搬はもぐりでおこなっていました。ところが、六月に南相馬市役所に来ていた衆議院議員高邑勉氏の計らいで、やっと許可証を出してもらえた。それをきっかけに、高邑議員も含めて経済的に意味がなくなった牛たちに、果たして生きる意味はあるのかという議論をするようになり、また。議論をするうちに被ばく牛を研究調査することで、今後の放射能被害に役立つ生かし方があると思えるようになりました。ずっと餌を運んで牛を生かしてきたわけだから、何らかの新しい意味を考えなかった。無駄にしたくなかった。その後、大学の獣医関係の先生やいろんな専門家の人が牧場に来るようになり、それが「希望の牧場」につながっていききました。

「希望」という言葉を使っていますが、はつきりいえば、浪江町は絶望的な状況です。「死の街」と誰かがいつていましたが、そ

苦情も随分あったので、現実には浪江町や榎葉町、富岡町、南相馬市小高区では、殺処分がおこなわれてしまいました。そのあいだも、動物愛護団体や私たちは、牛を生かすために抗議をしていました。それがようやく実って、今年四月一六日の警戒線の見直しにもない、農水省は、牛に餌を与えてもかまわないという方針に転換することを発表しました。原則は殺処分ですが、農家が望めば自分たちで管理しながら牛を飼うことを認めるということになった。これは大きな一歩だったと思います。

8

直接行動としての反原発運動

東京に行く際、私は必ず渋谷のハチ公前で演説をします。あそこは日本一人通りの多い場所です。原発と関係ないような人たち



2011年9月中旬に産まれた子牛
(撮影/木野村匡謙)



除染試験で牛から採取した血液



殺処分柵に設けられた木製の扉は、一度出ると戻って来れない仕組みになっている
(撮影/Kumiko OTANI)



の通りです。でも、絶望と希望は裏表です。人間は考える動物として、意味がなくなってしまうという絶望的な状況のなかにあっても、何らかの新しい意味づけのもとにあえて希望という背伸びした考えを持たなければ、それを自分にいい聞かせなければ、精神が崩れてしまいます。また、そういう状況に屈しないということとはまさに意地の問題です。「希望の牧場」を立ち上げて以来、さまざまな方から気持ちのこもったメッサージや募金をたくさんいただき、最近強く感じます。

浪江農場の牛たちは、餌が充分じゃないうえに頭数が多いので痩せていますが、表面的には何も変化はありません。子牛はたくさん産まれましたが、放射能の影響は見えません。日本獣医大学に来てもらって、被ばくの調査と除染の実証研究を二ヶ月間やりました。セシウムを落とすような特殊な水を飲ませて追跡調査してみると、有意なデータが出たんです。去年の一月二八日に報告書をまとめて、農水省に調査結果を提出しました。その水を私も飲んでいますが、ピーク時の三分の一くらいまでセシウムの量が落ちました。七月の検査でセシウム134とセシウム137が合わせて六六〇〇ベクレル/kgあったのが、いまは二〇〇〇弱まで落ちたんです。

今年に入っても依然として国は殺処分を主張して、県や町役場に圧力をかけています。実際に野良牛が民家を汚しているというのを前にして、浪江町の状況を伝えていきます。募金箱を置いて演説するわけですが、千円札の募金も多いし、なかには一万円札がちらほらあったりする。私は、一万円札での募金というのは、人の気持ち揺さぶっている証だと思えます。それだけのインパクトがあり、心にグサツとくるような言葉の「くさび」を私は街頭で叫び続けたいと思っています。私はいま五八歳になりましたが、残りの人生二〇年間をかけて、東電と国に対し、闘わねばと思えます。

闘いは継続していかないといいけません。でも、心が折れている人はたくさんいます。警戒線が引かれ、町の意見は分裂し、それで町がなくなっていく。たしかに、放射能汚染を示す地図を見れば、絶望するのにも無理はありません。港のほうはめちゃくちゃに粉砕されて、復旧なんてありえないでしょう。あの光景を見れば

愕然とします。でも、そんな状況で、被ばくしながらもうちの牛は生きています。

いま、圧倒的多数の人は、模様眺めになっています。東京に行つて行動を起こす人は、いったいどれほどいるでしょう。ただ待っているだけでよいのだろうか、結局、行動なきところに結果はないんです。もちろん私はそういう闘いの先頭には立ちませんが、やはりみんなやる必要がある。福島原発事故をめぐって脱原発のうねりが全国で起きている。その流れに私たちの運動や闘いも合流できるはずですよ。原発と農業は共存できないし、放射能汚染に福島県だけでなく日本が巻き込まれているわけだから。生の声をもって、警戒区域の被ばく民が行動すべきです。

9 浪江町の希望

浪江町のような放射能汚染地帯に帰る意味はないんです。チェルノブイリの事故と同じような荒廃化をたどるわけですよ。帰りたい人は帰るし、そうでない人は帰らない。補償金というかたちである程度は面倒を見るけど、それ以上は面倒見ないという「切り捨て」がはじまると思います。そういう切り捨てが、牛をめぐってもありました。国としての「棄畜」政策です。私たちが浪江に帰って米がつかれるかというと、難しいでしょう。米がつかれないところに、農家は帰らない。それに、子どもたちはもう帰って

させることができます。まだ警戒区域で踏ん張っている農家が十何軒かいて、そういう取り組みをもうはじめています。牛が雑草を食べて、排泄することにより、セシウムが濃縮される。そういう役立て方に、今年から取り組んでいくつもりです。傷ついた避難民の心のケアにも必ずなるでしょう。

最終的には、浪江町の人たちで東電の玄関口での座り込みがしたいです。失うものがない状況だからこそ、ほんとうの訴える力が出てくると思うんです。我々の真剣な気持ちを、実力で示すべきです。それが中途半端であったり、嘘であったりしたら、相手に伝わらない。殺処分の一部方針転換のように、私たちの闘いが実際に社会を変えていくことにつながっているわけです。生きた牛たちを、国が国の責任でどうするかをはっきりさせる段階にい



浪江農場の牛と吉沢氏
(撮影/木野村匡謙)

こない。ということ、学校も意味がない。そんなことでは、町として成り立ちません。みんな無理だとわかっているということ、は、はっきりいったほうがいいんです。

浪江町にはもう住めない。我々は、まさに「棄民」です。私の父が満州で捨てられたように、この汚染地帯の住人は捨てられるんです。もしくは、すべてを失った「流民」といえるかもしれません。それはいずれ「難民」になるでしょう。いま殺処分を受けている家畜の姿は、これからの浪江の人々の姿ですよ。政府は、まともな補償も出さず、なるべく汚染地帯をせばめて設定して、そこにパリケードをつくって封鎖するつもりです。生産活動ができないわけですから、お金をかけるだけ無駄だと思っっている。

ただ、浪江町だって、帰ろうと思えば帰れます。「被ばく別荘地帯」として帰ればいい。かつて線量が一五マイクロシーベルトくらいあったんですが、いまは五マイクロシーベルトを切るくらいまで落ちてきています。住むのは無理でも、一泊二日で帰ることはできるかもしれない。でも、私たちは挑戦すべきだと思う。ほうっておくと、田んぼは荒廃していくんです。食用の米はつくれないとしても、たとえばそこでバイオ作物燃料を植えるのであれば、可能性があると思います。それを国が、ちゃんと政策的に後押しする必要があります。帰る展望を示さないといけない。そこで私たちの牛が役に立てるかもしれない。たとえば、自分の牛を柵で囲って、電気柵を張り巡らせて、近所の田んぼを手入れ

決死救命、団結！ そして希望へ。

希望の牧場

●お問い合わせ先

「希望の牧場」ふくしま事務局

(電話) 03-3496-2177

(mail) kibouno.bokujou@gmail.com

●募金の振込先

「ゆうちょ銀行口座振替・銀行振込からの振り込み」

記号・番号・10140・59459781

口座名義・希望の牧場福島プロジェクト

(キボウノボクジョウフクシマプロジェクト)

※ゆうちょ銀行・郵便局のATMを利用した口座間振替は手数料無料です。

「他の金融機関からの銀行振り込み」

金融機関名・ゆうちょ銀行

店名・〇一八(ゼロイチハチ)

店番・018

種別・普通

番号・5945978

名義・キボウノボクジョウフクシマプロジェクト

※お振込の際の手数料はご負担となります。何卒ご了承ください。